

都留文科大学報

Vol.156
December.
2024



特集 70周年記念事業
つるフィールド・ミュージアム
副専攻プログラム

夏季休業を利用して学外で学ぶ／教育実習報告
講演会だより／文大だより／ぶんだい堂

特集

都留文科大学 70周年

創立70周年を迎えるにあたって

都留文科大学 学長

加藤 敦子



本学は令和7年度(2025年度)に大学創立70周年を迎えます。この節目を迎えるにあたり、これまで本学を支えてくださったすべての方々に、心より深く感謝申し上げます。

昭和30年(1955年)、本学は前身である山梨県立臨時教員養成所を承け、都留市立都留短期大学として創設されました。以来70年にわたり、「教員養成」を礎とする理念を掲げ、多くの学生たちが日本各地から集い、学びを深めた後、それぞれの志を胸に故郷や新天地へと羽ばたいていきました。その理想に向かう姿は、いまなお変わることなく、本学の伝統として息づいています。

一方、今日の日本社会は急速な少子高齢化という未曾有の課題に直面しており、大学もまた18歳人口の減少という厳しい現実に立ち向かわざるを得ない状況にあります。本学もその例

外ではなく、未来に向けた存続と発展のため、社会的役割を見直し、教育理念の深化、教学組織の再結成、そして「選ばれる大学」としての新たな魅力の創出に全力を注いでおります。

そうした中で迎える70周年は、単なる過去の歩みを振り返る節目にとどまらず、本学のさらなる成長を誓い、新たな未来を切り拓く契機であると考えております。この記念すべき年を、在學生、教職員、同窓生、そして地域の皆様が一体となって祝うものとするため、多彩な記念事業を企画しております。

70周年に先駆けて決定したコンセプトコピー「色とりどりのミライへ。」には、本学に関わるすべての方々がそれぞれに多様な輝きを放ちながら大学を彩り、未来へ進むという願いを込めました。また、記念ロゴは複数の候補の中から学生の人気投票によって選定されたものであ

り、学生が主体的に参加した象徴的な企画でもあります。

さらに、来年4月に竣工予定の「つるフィールド・ミュージアム」では、地域の方々とのさらなる交流の場として、新たな地域連携事業を推進してまいります。加えて、1号館の大規模改修を記念事業の一環として進めており、工事に先立ち「ホームカミングデー」を開催する予定です。この機会にぜひ都留のキャンパスをご訪問いただき、大学への想いや学びの記憶を共有していただければと考えております。

本学は、これからも日本中に優れた卒業生を送り出す大学としての使命を果たし続けるべく、教育・研究のさらなる充実に邁進してまいります。すべての関係者の皆様方におかれましては、引き続き温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

創立70周年を迎えて

都留文科大学 同窓会長

笹本 忠彦



本学が、令和7年度に創立70周年記念を迎えるにあたり、心よりお祝い申し上げます。この特別な節目に、同窓会長としてご挨拶できることを大変光栄に思います。

70数年前、私たちの母校は教育への情熱と地域社会への貢献を掲げて、「山梨県臨時教員養成所」として設立されました。それ以来、多くの優秀な人材を輩出し、社会の様々な分野で活躍する同窓生たちが、母校の誇りとなっています。同窓生が各分野で積み上げてこられた成果は、母校の理念と教育が確かなものであった証といえるでしょう。

振り返ってみれば、私たちが在学していた時代から、校舎や設備はもちろん、教育内容も大きく変化してきました。それでも、変わらずに守られてきたの

は、この都留の地で培った「仲間と共に学ぶ真摯な姿勢と、困難を乗り越える精神」です。それは私たち同窓生にとって、今もなお大切にしている価値観であり、絆でもあり、社会での成功や挑戦を支える礎となっています。

また、今日まで同窓会が継承できているのも、歴代の先輩方や会員の皆さまの尽力のおかげです。母校の発展と同窓生同士の絆を深めるために、これまで多くの時間と労力を費やしてくださったことに、深く感謝申し上げます。

70年という長い歴史の中で、私たちは社会的にも多くの変化を経験してきましたが、同窓会の存在意義は変わりません。これからも、母校と同窓生の皆さまをつなぐ橋渡しとしての役割を自覚し、次の世代へと受け継

いでいきたいと考えております。

結びになりますが、今後も母校の発展と皆さまのご健勝をお祈り申し上げるとともに、同窓会の活動に引き続きご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。さらに同窓生の皆さまには、今回の記念事業に是非一人でも多くの方にご参加、ご協力いただき母校の現状を見聞し、「大学愛」を深めていただければ幸いです。70周年というこの記念すべき節目が、この後の大きな飛躍への第一歩となることを信じております。今後ともよろしく願い申し上げます。

創立70周年事業に向けて、 『色とりどりのミライへ。』

事務局長 田中 正樹



都留文科大学は、昭和28年4月に開設された山梨県立臨時教員養成所を起源に、昭和30年4月都留市立都留短期大学が誕生し、昭和35年4月に4年制の都留市立都留文科大学へと移行し、以来、多くの変遷を経て、短期大学創設から数えて、令和7年度に創立70周年の記念すべき節目の年を迎えます。

この70年の歴史の中には、幾多の苦難がありましたが、本学の教育振興に寄せる先輩諸氏、同窓生の母校愛、地域の方々のツルブン愛に支えられながら、輝かしい歴史と伝統を築き上げ、今日まで発展して参りました。これまで全国から集まり本学を巣立った36,000余名の卒業生が、日本国内にとどまらず国外においても幅広い分野で活躍されていることは、本学及び地域(都留市)の誇りであり、誠に喜ばしい限りです。

現在本学は、文学部に国文学科、英文学科、教養学部には学校教育学科、地域社会学科、比較文化学科、国際教育学科を設置し、全国の47都道府県から入学者を集め、3,600名余りの学生が在学しており、人文科学を探究する大学として、確固たる地位を確立しております。

今後も、著しい少子化という逆境の中、全国の高

校生に選択される大学として、この学生数を維持しつつ、伝統と学風をしっかり受け継ぎ次のミライへ繋いでいかなければなりません。

さて、このたび、創立70周年という節目にあたり、これまでの本学の歴史を鑑み、諸先輩方の輝かしい業績を称えとともに、本学のさらなる飛躍と、新しい時代を逞しく生きる「ツルブン」の発展、「文大生」の育成を目指し、都留文科大学創立70周年記念事業期成会を結成し、次のとおり、記念事業を推進することといたしました。

記念事業のコンセプトについて

在校生、教職員、同窓生に本学への愛校心や帰属意識、矜持を持っていただくとともに、新しい大学像を実現するため、さまざまな記念事業を計画し、本学の教育研究活動及び地域貢献にも繋げてまいります。また、学外に向けても積極的にPRしてまいります。

記念式典や記念誌の刊行などのソフト事業だけでなく、教育施設の整備などのハード事業も計画しております。



【つるフィールド・ミュージアム】



【1号館1階ホール】



【1号館全景】

○各部会での事業内容

≪総務部会≫

- つるフィールド・ミュージアム竣工式
日付：令和7年4月29日(火・祝日)
場所：つるフィールド・ミュージアム
- 記念式典
日付：令和7年10月11日(土)
場所：都の杜うぐいすホール 大ホール
記念講演：講師 ロバート キャンベル氏
- ロバート キャンベル氏との対談やワークショップ
ロバート キャンベル氏との対談、学生とのワークショップ等の開催を予定

≪事業部会≫

- 記念事業【学生の意見も取り入れ、一緒に創りあげる事業】
合唱団、吹奏楽部、管弦楽団、各種サークルなど本学学生による発表会
- 歴史ある1号館の大規模改修前にホームカミングデーの開催
- 本学のPR動画の作成

≪記念誌編集部会≫

- 70周年記念誌の制作
大学の過去・現在・未来
「70年をふりかえる」として、これまでの地域交流研究センターでアーカイブ化した写真および、これから同窓生や地域の方から収集する写真等を使って、過去と現在の比較やふりかえりを行う。

さらに、学生の教育環境の整備・充実として、本学で最も歴史があり、また、多くの方に馴染みが深く、一番利用され、これまで本学の発展を見守り続けてきた「1号館」を、令和7年度から令和9年度にかけて全面的な大規模改修・リニューアルを実施いたします。

つきましては、本趣旨をご理解いただき、本学の教育のさらなる発展と次代を担う学生の育成のため、皆さまの温かいご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

都留文科大学創立70周年記念事業ご寄附のお願い

- 1 目標額 : 60,000,000円
- 2 募集期間 : 令和6年11月から令和7年12月末まで
- 3 寄附金の申込み方法
 - ①窓口に現金でお持ちいただく方法
 - ②本学ホームページを経由して決済サイトからクレジットカード等で決済する方法
 - ③金融機関(山梨中央銀行・ゆうちょ銀金)の口座へ振込む方法
※詳細については、後日、本学ホームページ等でお知らせいたします。
※個人でのご寄附の場合は、税制上の優遇措置(確定申告が必要です)があります。また、法人等の場合(法人税法第37条)、寄附金の全額を損金算入することができます。
- 4 ご厚意に対する感謝
 - (1) 寄附者芳名録への記載
 - (2) 寄附の特典
ご寄附いただいた金額に応じた70周年記念事業返礼品を準備しております。
- 5 問合せ先 : 都留文科大学 総務課 会計契約担当
TEL: 0554-43-4341(代表) / E-mail: kaikei@tsuru.ac.jp

特集

新棟の名称は

「つるフィールド・ミュージアム」 に決まりました

学長補佐 北垣 憲仁



本年度（令和6年度）の完成を目指して新棟の建設工事が進んでいます。新棟は、音楽棟の西側にある「つる湧水のほとり整備プロジェクト」事業地に建設されており、名称も「つるフィールド・ミュージアム」に決定しました。

「ミュージアム」という名が付いていますが、学びを支える環境の整備に力を入れています。また座学の学びだけではなく、地域の中で事象や活動にじかに触れる、機械的な暗記とは異なる生きた学びを経験できる施設を目指しています。

たとえば新棟の2階には、教員免許に関連した授業や実習で重要な家庭科の教室や実験室が配置されます。ここには被服についての専門的な実験室が設けられ、染め物なども本格的に体験できるようになります。安全性に配慮したIH調理実習室も整備され、オープンも各面台に設置されることとなります。こうした施設は、私たちの生活に不可欠な衣・食・住について学び、豊かな食体験などを通じて地域の環を育む場となることでしょう。

1階には20人規模の授業や実習、ゼミを想定した教室があり、学生と市民との交流事業や公開講座などにも活用できます。

学びを支える環境は教室だけではなく、本学の地域での取り組みは長い歴史をもち、教員や学

生、市民がさまざまな教育・研究の実践を蓄積してきました。そうした諸実践の貴重な資料も数多く残されています。それらを学習材として誰もが活用できるようにアーカイブズをさらに充実させます。

新棟では、自然環境に恵まれた本学の特色を生かし、自然との共生も重視しています。キャンパスには、ムササビも生息している森がありますし、キンランやカワラナデシコなど絶滅が危惧される植物も生育しています。本学の生物多様性に資するよう、保全とともに生きものの賑わいを感じられるビオトープを整備します。オミナエシやキキョウなど教科書に登場する植物を言葉だけでなくビオトープでじかに触れて確かめる経験は、学びをさらに豊かなものにしていく契機となるでしょう。

近年、「フィールド・ミュージアム」やそれに類した名称の大学施設が各地に誕生しています。しかし、地域を博物館（ミュージアム）に見立て、自然や文化の事象に親しみ、じかに触れ、学びを深めていこうとする本学の「フィールド・ミュージアム」構想はこうした大学施設の先駆となるものです。

特色ある本学の取り組みを世界にも発信し交流の輪を広げていきたい。「つる」という表記にはそのような思いが込められています。



■1階の多世代交流スペースのイメージ



■2階の被服室のイメージ

特集

学びの可視化 —都留文科大学副専攻プログラム

学長補佐 日向 良和



はじめに

都留文科大学副専攻プログラムが2024年度から始まりました。カリキュラムにさまざまな学びがある中で、学生たちが「何を学んでいくか」を見据えながら履修科目を選んだり、学んだことを振り返って、「何を学んだか」を可視化し、社会に示していくための新しい仕組みとなっています。

副専攻プログラムの概要

都留文科大学副専攻プログラムは、2024年度入学生から適用される新カリキュラムにおいて、特定テーマの科目群を指定して副専攻コースとし、卒業までにコースの全ての単位を取得した学生に対して、卒業時に大学から副専攻修了証にて副専攻修了を認定する制度です。副専攻とは、学科の専門科目を学び学位として認定される主専攻とは別に、大学独自に学生の学びを認定する制度であるため「副専攻」という名称になっています。

副専攻プログラムの狙い

先に示しましたが、副専攻プログラムの主な狙いは大学で何を学ぶかの選択にテーマを示すことと、学んだことの可視化です。大学には専攻として学び卒業論文まで執筆して学ぶ主専攻の他に、共通教育科目や自由に選択できる科目、コースが用意されています。これまでのカリキュラムでも選ぶことはできましたが、その科目で学ぶことを一つ一つの科目のシラバスを確認しながら選ぶ必要がありました。副専攻のコースであれば学びたいテーマに沿って科目を選ぶことができます。次に学びの可視化です。主専攻は卒業論文や学位記などで学んだことを明確に示すことができますが、共通教育科目や自由選択科目で何を学んだのかを示すことは困難でした。副専攻プログラムでは修了証や取得見込み証明書などにより、大学での学びを社会へ明確に示すことができます。現在10の副専攻プログラムが開講されています。ぜひコースを選択し自分の学びを自分で組み立ててください。

スタート時の状況

令和6年4月からスタートした副専攻プログラムの状況について、私が一部科目を担当しました「デジタルシティズンシッププログラム」「フィールドミュージアム研究プログラム」について紹介したいと思います。2つのプログラムはどちらも教養科目に位置づけられており、全ての学科の学生が選択、履修することが可能です。令和6年度の新入生からスタートなので、現状は新1年生が前期に履修した状況となります。デジタルシティズンシップおよびフィールドミュージアム研究の両方で入門的科目として「デジタルシティズンシップ入門」「フィールドミュージアム入門」という科目が設定され、できるだけ最初に履修することが勧められています。令和6年度デジタルシティズンシップ入門の履修登録は24名、フィールドミュージアム入門は29名が履修登録をおこないました。デジタルシティズンシップ入門では「デジタルシティズンシップ」とは何かという理解を目的とし、社会のさまざまな課題解決でICTを活用していく姿勢、意識を育てることを目標としました。履修生に対して、地域の課題解決のためにどんなICT活用が想定できますか？という課題を出したところ、都留市の地域情報発信の上でVRやGISの活用などのアイデアが出されました。また科目履修後、山梨県主催の「大学生DXリーダー育成研修」に参加してさらにスキルを磨く学生も出ており科目の目標が達成できたと考えます。フィールドミュージアム入門では、現在地域交流研究センターで地域を題材にした学習プログラムを実施している教員が、2回程度を担当するオムニバス形式で開講され、学内の植物の葉を採取してそれについて調べるMy leaf 図鑑づくりや料理を実際に作って食べてみるなど、フィールドワークなどを通して、フィールドミュージアムの幅広さや楽しさを知ることができました。どちらの科目もほぼ全員毎回出席があり、副専攻コースの次の科目履修に繋がっていくことができました。副専攻プログラムで学ぶことが明確化されたことで、学生の学習意欲が高まっていると感じることができたと感じています。今年度は初年度ということで学生も担当教員も手探りでしたが、来年度以降の科目に向けて今年度の科目の振り返りを現在おこなっています。

博物館実習を経て

国文学科 4年
照井 保乃華



8月末から9月頭にかけて、秋田県立博物館と秋田県立近代美術館の2館で博物館実習を行いました。実習はそれぞれ6日間ずつ行われました。普段は見られない収蔵庫の見学や実際の資料を使った保管方法など、講義だけでは経験できなかったことを数多く学ぶことができた12日間でした。

今回の実習で特に印象に残っているのは、美術館で開催したイベント補助の実習になります。私は、以前まで博物館や美術館といった施設は敷居が高い場所だと思っていましたが、それは私だけではなく、多くの人が考えていることではないでしょうか。そんな中、私が参加した子供を対象としたイベントでは、子供たちが生き生きとした姿で作品作りを取

り組んでいました。作品や資料に親しみをもってもらうこと、それを学びに繋げてもらうこと。イベントを通じ、これらの目的をどうやって達成するかということの難しさや楽しさも学びました。これは、来館者の立場だけでは分からなかった視点です。

博物館実習での学びは、私の視野を広げてくれた貴重な機会でもありました。展示の意図や狙い、そこから得られる学びについても考えながら、今後も鑑賞を続けていきたいと思います。



展示作品の解説

アメリカでのホームステイから得たもの

英文学科 3年
恵比寿 葉月



夏季休業期間に財団法人の国際交流プログラムの引率として、1ヶ月間アメリカ・ペンシルバニア州へホームステイに行ってきました。このプログラムは中学生の頃に参加者として経験したもので、今回は引率者としてまた異なる経験ができました。大学生となり、英語力が向上したことで多くの人と深い会話ができ、新たな気づきも得ました。

特に感じたのは自分の意見を持ち主張する大切

さです。ホームステイ先の子どもたちは、自分のしたいことや嫌なことをはっきり伝えており、それがとても印象的でした。これまで自分は相手に合わせがちでしたが、勇気を出して自分の意思を伝えると、子どもたちは喜んで応えてくれました。この経験が今の生活でも自己主張する勇気につながっています。異文化理解と共に、自己成長にもつながる貴重な体験でした。



ホームステイ先の子どもたちと

自分を変えたカナダ旅 —異国の文化や教育に触れ、 見えてきたこと—

学校教育学科 4年
岡本 彩佑



この夏、人生で初となる海外旅行をした。3泊5日という弾丸旅でカナダへ渡り、バンクーバーの観光名所やポイント・グレー・セカンダリー・スクールを高校時代の友人と2人で訪ねた。今回の最大の旅の目的は、卒業論文のための調査をすることだった。日本人の先生が、バンクーバーの地で数学を教えているということを知り、実践を生で見たいと思い、国境を超える決心をした。

実際にカナダに行ってみると、ワクワクすることばかりだった。英語を話すことが得意ではない私たちが、「なんとかなる」で過ごしきることができた。

とてもフレンドリーに声を掛けてくれる方が多く、何を言っているのか全部を理解できなくても、コミュニケーションを楽しむことができた。

セカンダリー・スクールでは、日本でいう高校2、3年生がとる授業と中学3年生の授業を見学させていただき、スペシャルクラスの授業の様子を説明していただいたり、図書館にも案内していただいたりした。授業以外で一番印象に残っていることは、先住民の文化も大切にしているということだ。図書館には、先住民を象徴する絵画がいくつも飾られていた。

これまでの私は、海外旅行に消極的であったが、一度行ってみると、他の国にも行ってみたいという気持ちがとても強くなった。様々な文化に触れ、多くの人と出会うことをこれからも大切にしていきたい。



ポイント・グレー・セカンダリー・スクールでの記念写真

佐世保から学ぶ

地域社会学科 3年
田中 太晟



地域経済論ゼミでは8月20日から8月23日にかけて長崎県佐世保市でフィールドワークを行った。前期ゼミで研究テーマを設定し、文献・資料調査、ヒアリング調査の事前学習、事前準備を行った。

1日目は、「させぼ四ヶ町商店街」の景観調査及び、同商店街組合理事長の川尻章稔様より、商店街の現状、活性化についての貴重なお話を伺った。

2日目及び4日目は、ゼミ生がそれぞれのテーマについて調査を行った。私はエコツーリズムの調査をするため「西海国立公園十九島パールシーリゾート」を訪れた。同職員の方及び、佐世保市役所の方に十九島の自然についてのお話を伺うとともに、シーカヤック体験やクルーズ船の乗車など観光も楽しん

だ。佐世保観光コンベンション協会職員の方からはエコツーリズムのツアー構成や歴史についてお話を伺った。

3日目は全員で市内バス見学を行った。佐世保重工業株式会社の工場見学、海上自衛隊佐世保資料館の見学、佐世保五番街へのヒアリング調査など非常に濃い1日だった。

4日間を通じて多くの方から貴重なお話を伺うとともに、佐世保市全体の産業経済を幅広く学ぶことができた。

調査にご協力いただいた皆様ありがとうございました。



佐世保市内の様子

学ぶものは身近にある

地域社会学科3年
松木 生



私はこの夏に、地域社会学科の佐脇英志先生のゼミ企画にて小菅村を視察した。人口600人ほどの村であり、近くのスーパーまで車で30分以上もかかるような山間部に位置する。

はじめに、このような過疎地域でドローンを用いた先進的な取り組みを行うエアロネクスト社へ訪れた。ここではSky Hub®というデジタル技術と最新のテクノロジーを活用した「新スマート物流」の見学を行い、地上の物流と空中のドローン物流が連携することで効率的な物流を提供する仕組みを学んだ。

その後、村長へのインタビューから「日本の縮図である小菅村が何とかなれば、日本は何とかなる」という思いのもと進められている様々な村づくりに

ついて理解を深めた。

最後に、クラフトビールの製造販売をし、世界28ヵ国へ輸出をするFar Yeast Brewing 源流醸造所にて工場見学、代表取締役社長の山田さんからお話を伺うことができた。「ビールの多様性と豊かさを取り戻す」という山田さんの思いと地域活性化の考えをもとにした取り組みなどについて学んだ。

今回の視察を通して、地域社会と企業の協働による地方創生の先進的なモデルを学ぶことができた。この身近な学びを新たな学びへと繋げていきたいと感じる。



Far Yeast Brewing 源流醸造所での集合写真

タンプーラと、電気自動車と、食と。—加速する社会にて

比較文化学科4年
佐川 颯一郎



鈴の音で太陽を迎える。寺院ではプジャをして回る人々がいる。車道では鶏、犬、ヤギ、水牛が闊歩する。以前からの調査計画が白紙に戻った朝である。昼にはタンプーラの出すドローン(持続音)に身を委ねた。ドローンは喉の振動に共鳴し、倍音へと変化する。僕は南アジアの音楽学校へと転がり込んでいた。

それでも現地へ足を運ぶことで知ることはある。バレン・シャハは若干34歳元rapperで現役市長である。彼の快進撃は止まない。サマクスィー

(samakhusi /सामाखुसी) 道は整備され、車の往来が加速していた。露天商や野良犬グループはその場を離れ、以前には無いファストファッションの店が何軒も立ち並ぶ。車道整備と共に道の質(利用方法と利用者)も変化している。ディーゼル車は電気自動車に変わりつつあり、咽せかえる排気ガスは減っていた。音楽学校周辺はまだこの波には呑まれていない。

ここはネパール。食べる分だけ人の繋がりが増えるダルバートは、混ぜることで本領を発揮する。タンプーラも声を混ぜ、美しい響きを導いていた。自身の五感・偏見を持って、現地で混乱し、如何に自身の生きる社会が異質なものであるかを知ることができる。これこそ比較文化であると僕は考える。



毎週土曜日の子供向け無料開校日の様子 奥に並ぶ楽器がタンプーラ

競走馬の生産牧場を訪れて

国際教育学科3年
小林 陸



私は8月24日から9月2日に北海道にある静内フジカワ牧場という競走馬の牧場で仕事を体験させて頂きました。競走馬の牧場には誕生からセリで購入されるまでの仔馬とその母馬を管理する生産牧場、レースに向けた体作りやレース後のリフレッシュなど現役の競走馬を扱う育成牧場、引退後に観光目的で余生を過ごす養老牧場があります。私は競走馬の血統を考えることに興味があったため、生産牧場の場長の方と連絡を取り、貴重な機会を頂くことが出来ました。

牧場の朝は早く、4時半に馬を牧草地に放すことから始まりました。午前中に馬房の藁の入れ替えと

餌作りを行い、午後には馬を馬房に戻し、餌や水の入ったバケツをセットします。その後、餌や水の減り具合や馬の様子を見ながら馬に異常がないか確かめます。就業時間は約8時間で18時半頃に仕事が終わります。

牧場での仕事は体力はもちろん、馬の安全確保のために細やかな気配りも求められる仕事で想像以上にタフな仕事でした。また、限られた人手で馬を管理しなければならないため、1頭1頭に寄り添うということがいかに難しいことかを思い知りました。この経験を無駄にせず、自分の将来について考えていこうと思います。



放牧地へと馬を引く様子

充実した3週間

国文学科2年
井村 日菜子



私は、夏季休業中にスペインのサラマンカ大学の短期語学研修に参加しました。日本とは全く違う街並みや気候、食事など、全てが新鮮で、常に学びと感動に溢れていました。

平日は、4時間スペイン語を勉強し、午後は友達とカフェや買い物、休日は旅行やお祭りを楽しみました。サグラダ・ファミリア等の建築を見学できたことも良い思い出です。

そんな様々な経験ができた中でも、外国語で会話することの難しさと楽しさを実感できたことが強く印象に残っています。スペイン語を勉強している日本人と、日本語を勉強しているスペイン人の交流会で仲良くなった友達と一緒にカフェに行った時、伝えたいこ

とが上手く文章にできず、自分のスペイン語力の無さを痛感しました。しかし、彼女は私の言いたいことを汲み取ってくれて、1時間ほど経つ頃には会話を楽しむことができていました。また、お互いの言語を教え合ったり、趣味が同じことが判明したりして盛り上がりました。自分の言葉が伝わったときの達成感と感動は忘れられません。

一緒に研修に参加した友達や先生方をはじめとする多くの方の存在のおかげで、短くも充実した濃い3週間を過ごすことができました。ありがとうございました。



帰国前最後の夜 マヨール広場での集合写真

初めの一步を踏み出す

英文学科 2年
勝谷 優士



私は夏季休業中、カナダのリジャイナ大学での短期語学研修に参加しました。私にとってこの研修は初めての海外渡航であったため、どうなるのかという少しの不安と初めての海外への期待を膨らませながらカナダに飛び立ちました。

現地に着いてまず驚いたことは、見渡す限りに全く山がない平地であったことです。それから食べたことのない味のお菓子や飲み物、またお店の注文の方法やカナダの文化などに、驚きの連続でした。そんな中で最大の不安点であったのが、英語でうまく会話ができるのかどうかということでした。しかしながら、その不安もすぐに吹き飛びました。大学の食堂で会った人や現地の店員さんはみな、私の拙

い英語を理解しようと努めてくれて、時には楽しそうに相槌を打ってくれました。探り探りでの会話でしたが、自分が一生懸命に英語で話してそれが相手に通じた時には、単に会話が楽しいという以上の喜びがありました。日本にいと、英語がネイティブである人と会話をする機会はあまりなかったため、3週間英語が当たり前で使用されている環境に身を置けたことは、話すこと、聞くことの両方の面においてとてもいい体験になりました。この経験を活かし、今後の学習につなげていきたいです。



現地レストランで話しかけてきてくれた店員さんと

西安を見て思うこと

比較文化学科 1年
橋本 真季



私は9月に中国の西安へ、約1か月間の語学研修に行ってきました。中国語能力はまだ未熟で、日常的な会話すら難しい状態でしたが、ゆっくり話したこともきちんと聞いてくれた西安の方、スマートフォンの辞書、そして最終手段である翻訳機能のおかげで、なんとか乗り切ることができました。

午前中の授業を終えたら街へ出て、大学周辺を散策したり、近くの観光地へ行きました。地下鉄やタクシーを使って移動することが多かったですが、徒歩での移動が好きでした。街を歩くと、建物、人がよく見えます。最初のうちこそ「外国だ」と身構えていましたが、慣れれば西安も日本も同じように見えてきます。ここにいる人たちは中国で生まれ育っ

たから中国人と呼ばれ、私たちは日本で生まれ育ったから日本人と呼ばれますが、中国人と日本人の違いは本当にそれだけなのだろうと思いました。なにか根本的に違うような気がしていましたが、本当に同じ人間であるということを実感しました。もし、他の人がこの西安の街を見たら、また違ったことを考えるのでしょうか。

体験から得る気づきや学びは、1つでなく、それゆえに貴重なものだと思います。私は私の感じたことを大切に、都留でまた学んでいきたいです。



最終日、クラスメイトと撮った写真

教育実習での学び

国文学科 4年 庄司 莉澄



2024年5月に母校の高校にて2週間の教育実習を行いました。授業では古典を教えました。2週間の教育実習の中で特に授業づくりについて学びを得ることができ、短い期間ではありましたが自身の成長を感じることができました。

授業づくりでは主に以下の三つのことが大切だと学びました。一つ目は「授業で何を教えたいかを明確にすること」、二つ目は「どのような発問をするか」、三つ目は「いかに生徒に考えさせるか」です。

一つ目の「授業で何を教えたいかを明確にすること」は、授業準備の一番初めの段階で大切になってくることです。それが授業の骨組みになります。教える教材のどこに面白さがあり何を教えるのかを、教材をよく研究し自分で考えることで、ただ教材の内容を教えるのではなく、教材を通して様々なことを教える授業ができるようになります。実習先の指導教官からも「授業の技術面は向上させるために時間を要し、急にできるようになるものではないが、授業で何を教えたいのかという核を持つことは授業の技術とは関係がなく今からでもできることであり、授業づくりにおいて一番大切なこと」だと教えていただきました。

二つ目の「どのような発問をするか」は、「生徒の興味を引き付ける発問かつ、多様な意見が出る発問」を考えることが大切だと学びました。授業は教師が一方的に教え込むのではなく、生徒が教師の発問について自分たちで考えることで生徒主体の授業をつくっていくことができます。教育実習の授業準備では、発問を考えることに多くの時間を費やしました。

三つ目の「いかに生徒に考えさせるか」は、授業準備の段階ではなく、実際に授業をする際に大切になることでした。教育実習中は、「何を教えたいか」「どのような発問をするか」を意識して授業準備をし、授業に臨みました。発問をした後

はペアやグループで考えてもらいました。しかし、用意した発問に対して誰も答えてくれませんでした。誰も答えてくれない沈黙に耐えられずに、自分で発問の答えを言ってしまい、生徒に考えさせる授業ができませんでした。そうすると、ただ教師が一方的に喋る授業になり、授業に山場をつくることができず単調な授業になりました。眠くて寝てしまう生徒もいました。そこで、研究授業ではその反省を活かし、何としてでも生徒から意見を聞き出すという気持ちで授業に臨みました。最初はいつも通り、発問に対して考えてもらっても生徒は自信がなく答えてくれませんでした。そこで「ここは皆に考えてほしい、もう一度頑張ってみよう」という旨の声掛けをして、自分では答えを言わず、生徒に考えさせました。そのようなことを繰り返していくうちに話し合いも活発になり、生徒から意見が出てくるようになりました。そうすると授業が単調ではなくなり、どの生徒も上を向いて真剣に授業に参加してくれるようになりました。

ご多忙の中ご指導くださった先生方には深く感謝しております。教育実習で学んだことを活かし、さらに自己研鑽を重ねていきたいと思ひます。



生徒からの色紙

先生への尊敬と楽しさの発見

英文学科4年 谷口 陽菜



私は2024年5・6月に母校である私立三重中学校で3週間の英語科教育実習を行いました。学生時代にお世話になったたくさんの先生方と再会し、中学・高校の6年間を過ごした思い出がいっぱいの場所での教育実習は非常に感慨深いものでした。

1週目は主に授業の見学をしました。実習校は中高一貫校のため、中学だけでなく高校の授業も見学できました。また、教科書中心やスピーキング中心など英語がいくつかの科目に分かれていることや先取り学習など、私立ならではの授業の内容や進度を学ぶことができたため、非常に有意義な時間を過ごすことができました。授業や雰囲気作りなど先生方には一人ひとりのスタイルがあり、その技量に圧倒されると同時に、いつも笑顔で生徒と接している先生方に尊敬の気持ちを抱きました。

また、1週目に行われた体育祭が生徒との距離を縮める大きなきっかけになりました。生徒と一緒に応援し、声をかけたことでクラス全員と話をすることができました。たくさん話をする中で物静かな生徒も心を開いてくれると気づきました。授業や休み時間以外にも掃除や登下校でのバス・電車内でも生徒と関わる機会があり、自ら積極的に挨拶や話をする中で生徒の名前と顔を早く覚えることができました。その結果、生徒から話しかけてくれたり部活を見に来てほしいと誘ってもらえたりすることが増え、私は「先生」と呼んでもらえることに喜びを感じました。

2週目からは1年生の授業を担当しました。どのクラスもアクティビティを積極的に行っており、想像以上に活発でした。一方、元気すぎるあまり前を向いて話を聞く時間とペアでやりとりをする時間のメリハリをつけさせることに苦労しました。ペアワークの際の机間支援では、初めは教室を回りながら生徒の発言を聞き困っていきそうであれば声をかける程度でした。しかし、授業の見学や

先生方からのアドバイスを通して、立ち止まって生徒の声が聞こえる距離まで近づき、生徒の発言をしっかり聞く必要があると考えようになりました。机間支援では褒めたり教えたりしながらコミュニケーションを取り正しい理解を促すことが大切だと気づきました。これは私にとって教育実習での最も大きな学びの1つでした。

研究授業は教育実習の集大成でもあり、学年やコース、教科を超えて見に来てくださる先生方に自分自身の成長した姿を見ていただく機会でもありました。18名の先生方が研究授業を見に来てくださいました。私も生徒も緊張していましたが、生徒に助けてもらいながら無事終えることができました。研究授業のフィードバックでは、英語の授業に関してだけでなく教員としてのアドバイスもいただき、新たな視点を獲得することができました。

教育実習は大変でしたが、それ以上に非常に楽しく充実していました。教育実習生としても人間的にも成長し、人生においてとても貴重な経験になりました。教育実習を終え、教員になりたいという思いがより一層強くなりました。教育実習を受け入れてくださりサポートしてくださった校長先生や指導教員をはじめとする多くの先生方から心より感謝申し上げます。



実習最終日に生徒が描いてくれたイラスト

教師への第一歩

学校教育学科3年 古橋 美菜



私にとって母校での教育実習は、人生で1番濃い4週間でした。令和6年9月2日から9月27日、私は浜松市の小学校で教育実習を行いました。実習期間中は、毎日が新しい発見、新しい学びの連続で、一息つく暇もないぐらい多忙で充実した日々でした。実習中の様々な思い出や子どもたちの元気で明るい笑顔がよぎる今日この頃、ここでは、学習指導と教師としての2点から、教育実習での学びを振り返っていこうと思います。

まずは、学習指導です。実習中は、指導教諭の先生、専科の先生、初任の先生等、多くの先生方の授業を参観させていただきました。先生方の落ち着いた様子で、子どもの発言に耳を傾け、状況に応じて活動や指示を変更する臨機応変さから、目の前の子どもの実態に合わせた緻密な教材研究を重ね、子どもと一緒に授業をつくることの大切さを学びました。私の担当学級は1年2組、在籍人数35名の子どもたちです。先生方の授業技術を参考にさせていただき、実習2週目から計12回の授業実践に臨みました。その中で、授業の時間配分、子どもたちへのノート指導や作業指示の難しさを感じ、発問や指示の視覚的支援や板書の重要性を学びました。集大成である研究授業では、今までの反省を生かし、入念に教材研究をして、授業の流れを完璧に掴んで挑んだつもりでしたが、多くの反省が残る授業となりました。授業後、指導教諭の先生から、授業の講評とともに「自身の中で100点満点の授業は今までに一度もない。学び続ける姿勢を常に持ちたいと思っています。」と助言いただき、そのお言葉が励みとなりました。私も、反省から学ぶことを怠らない教員を目指します。

次は、教師としての学びです。実習中、私が先生として子どもたちに何かを教えるよりも、子どもたちから学ぶことの方が多く、元気や笑顔も子

どもから沢山分けてもらいました。また、実習期間が音楽会と重なっていたこともあり、子どもの成長や直向きに取り組む姿勢にも触れることができました。練習に前向きに取り組めなかった子どもが、自分の気持ちと葛藤しながらも本番を迎える姿、本番でやり切る姿は、特に印象的で感動しました。そんな子どもたちが実習最終日、「ありがとうの会」を開いてくれました。最後の貴重な時間を、愛しい1年2組の子どもたちと楽しく過ごせてとても幸せでした。お別れは、多くの子どもが涙を流しながら大号泣で「ありがとう」を伝えてくれました。そんな様子から、4週間一緒に過ごしてきた時間の中で、私も1年2組の子どもたちに何か残してあげることができたかもしれないと思うと、とても嬉しく自然と涙が溢れました。

子ども1人1人に寄り添い、小さなことでも子どもの成長や頑張りを、常に笑顔で褒め称えておられる指導教諭の先生の姿は、まさに私の理想とする教師像でした。小学生の頃から憧れていた夢の「教師」という第一歩を、母校の魅力溢れる先生方のもとで経験することができたこと、何よりも感謝の気持ちでいっぱいです。その気持ちを忘れず、教員採用試験、その先の教職人生に向けて、さらに見識を広めていきます。



実習最終日、お別れ後の教室

母校での三週間

学校教育学科3年 奥山 誉人



私は八月下旬から三週間、母校である新庄市立萩野学園にて教育実習をさせていただきました。母校での実習ということで、緊張や不安はもちろんあったものの、当時お世話になった先生方にもお会いすることができ、比較的落ち着いた気持ちで過ごすことができました。一方で、今の自分は実習とは言え教師としてこの校舎にいるんだ、という気持ちもあり、一層気を引き締めなければとも感じました。

今回担当した学級は2年A組でした。今年から始まったSAT活動でも2年生を担当していたため、実習初日から積極的に子どもたちと接することができました。子どもたちもすぐに心を開いてくれて、休み時間になると毎日のように「先生遊ぼう!」と誘ってくれたことが嬉しかったです。授業を見ている時も、気軽に分からないことを質問してくれたり意見を言ってくれたりしました。

実習の後半では毎日授業をすることになったのですが、授業準備がとても大変でした。一時間の授業をするだけでも、指導案やワークシートなど、毎回準備に時間がかかっていました。授業自体も思ったようにいかないことが何度もありました。大学でも模擬授業は何度か行いましたが、実際の子どもの反応は予想できないものばかりで、その場で対応する瞬発力が求められました。授業後は担任の先生や他の先生方からの指導を受け、常に改善する姿勢を心がけました。その他の場面でも、自分一人では解決できなかったと感じることは多く、先生方には大変お世話になりました。

今回の実習では、校外学習にも参加させていただき、通常の実習では中々できない経験をすることができました。事前の打ち合わせや終わってからの反省会など、先生方はこんなこともしていたのか、と驚きました。また、今回は小学校実習だったのですが、萩野学園は小中一貫校

であるため、中学生の方の授業も見させていただきました。やはり小学生と中学生では、日常生活での接し方や授業での対応など、決して同じようなやり方では上手くいかないこともあり、新しい視点を持つことができました。

今回の実習を経て、自分の中での教師という職業に対するイメージが変わりました。世間一般ではよく教師に対して、ブラックな仕事などマイナスな意見を持たれることがあります。今回の実習でも確かに、大変だと感じたり辛いと感じたりすることが多くありました。しかし、ただ大変なだけの仕事なのではなく、子どもたちの成長を間近で見ることができる、やりがいのある仕事なのだと分かりました。実習で学んだことを活かし、今後の大学生活も精進していきたいと思います。



国語「どうぶつ園のじゅうい」の授業の様子

学びで溢れる3週間

地域社会学科3年 勝又 理子



私は9月上旬から3週間、母校の中学校で教育実習を行いました。3週間という限られた時間の中で、「生徒や先生方と積極的に関わり、学ぶ」「自分を知る」という2つの目標を掲げ、様々な経験を通して、多くのことを学ぶことができました。また、担当学級が3年生だったこともあり、進路に関することや勉強法についてなど、様々なことを相談されました。自分が知っていること、経験を踏まえて、少しでも生徒の力になれるように、精一杯努めました。

実習初日は、緊張と不安な気持ちで学校に向かいました。学校へ到着すると、先生方や生徒が温かく迎え入れてくださり、不安な気持ちはすぐに忘れていました。まずは生徒について知ることが大切だと思い、生徒と話すことや、少しでも多くの時間を生徒と過ごせるように努めました。また、多くの社会科の先生方の授業を見学させていただき、導入で使う教材や、授業方法など、大学の授業だけでは知ることのできないことを多く学ばせていただきました。

実際に授業が始まってからは、指導案を作成する中で、授業目標に対してどのような問いかけをすれば、目標に近づくことができるのかなど、考える毎日でした。最初の授業では、50分の授業をやりきるだけで精一杯でした。担当教諭の先生に授業前後で手厚い指導をしていただき、少しずつ自分でも成長していると感じられました。特に、授業の中で生徒と対話することを意識し、教員が伝えるのではなく、生徒自らが気付くことができるように流れを作ることの大切さと難しさを実感できたことは、大きな経験になりました。

実習の終盤では、実習の集大成としての研究授業と生徒との別れがありました。研究授業では、これまでの授業経験を最大限に活かせるように努めました。生徒1人1人が考え、学級全体で議論を行うことで学びが深まり、生徒とともに

に作り上げた研究授業になったと感じています。また、研究授業を行ったことで、授業と学級経営や生徒の人間関係は、表裏一体となっていることを実感し、「生徒を理解する」という言葉の意味を改めて理解することができたと思います。実習の最終日には、担当学級の生徒が卒業式を開いてくれました。メッセージや合唱などを用意していただき、驚きや嬉しさとともに、実習が終わってしまうことを実感しました。できるのであれば、もっと長く教育実習をしたいと思うほど、たくさん学び、成長し、充実した3週間でした。

最後になりましたが、ご多忙のところ教育実習を受け入れ、ご指導いただきました校長先生をはじめとする先生方、授業前後での手厚いご指導や、少しでも多くのことを経験する機会を設けてくださった指導教諭の先生、授業内外で関わることによって、多くのことを学ばせてくれた生徒の皆さんに心から感謝申し上げます。今回の実習で学んだことを、最大限に活かしていきたいと思っています。



生徒たちからのメッセージと卒業証書

教育実習から感じたこと

国際教育学科4年 荻田 藍奈



私は、6月3日から21日までの3週間、母校の中学校で教育実習を行いました。指導教科は英語でした。実習前は、生徒たちと仲良くすることができるのかという点や、少しでも英語の授業が楽しいと思えるような授業ができるのかという点についてとても不安でした。しかし実習が始まってみると子どもたちが楽しそうに言語アクティビティをしている姿をたくさん見ることができ、私自身も授業するというのを緊張しながらも楽しむことができたと思います。

実習第1週目は、多くの授業を見学させていただきました。特に印象に残っているものは、学活の授業で修学旅行の思い出を発表するというものでした。生徒たちはスライドを作成し、BGMも付けて発表していました。スライドを作成している様子や、発表している様子を見て、生徒一人一人がタブレットを使い慣れている様子を見ることができ、改めて学校現場でのICT化が進んでいるように感じました。また、校長先生や教頭先生からのお話を聞く機会もあり、教員側から見た時の学校の在り方や、地域、保護者との関わり方などについて学ぶことができました。

実習第2週目は、3年1組と2組で英語の授業をさせていただくようになりました。初めて授業をしたときは、緊張してしまい、どのように授業を進めていくのかというところに気を取られていたので、生徒の反応を見ながら授業することができませんでした。また、英語で指示を出すときにわかってなさそうだと感じると日本語で補足しながら授業を進めてしまう場面もありました。しかし、回数を重ねるごとに授業をすることに対して余裕がもてるようになり、クラス全体を見ながら授業を行うことができるようになりました。また、指示が伝わっていないと感じる場合には生徒同士で確認してもらうようにしてできる限り日本語で補足しないように心がけていきました。

実習第3週目は、3年3組と4組でも研究授業で行う内容を授業させていただきました。研究授業では生徒が楽しく学んだ内容を活用し、自己紹介と他己紹介を行う授業を行いました。授業では、英語が得意な子に対する追加の指示や英語が苦手な子に対する指導などのバランスを取るのが難しいと感じました。ただ生徒からは楽しかったという声や、友だちの新しい一面を知れてよかったなどと言ってもらえました。私は楽しい授業を行いたいと思っていたので、生徒たちから楽しい授業だったと言ってもらえてとても嬉しかったです。

今回の実習では、先生方の生徒との関わり方や授業技術を学ぶことができ、とても充実した3週間になりました。特に、学校を教師の目線から捉え直し、生徒一人一人を見て個に応じた指導をしていく大変さとやりがいを改めて考えることができました。この貴重な経験を忘れず、これからも子どもたちにとってどのような教育が必要なのかを考え、学び続けていきたいです。



生徒たちからもらったメッセージブック



都留文科大学国語国文学会 講演会

行為への誘い —文学教育の過去と未来—

開催 7月20日(土)

講演者 丹藤博文氏

2024年7月20日(土)に愛知教育大学特別教授丹藤博文先生をお招きし、令和6年度都留文科大学国語国文学会講演会を開催した。今年度から講演会は年1回の開催となり、今回は国語教育学に関する講演会となった。丹藤先生と都留文科大学は浅からぬ縁でつながっている。関口安義先生、田中実先生、鶴田清司先生、牛山恵先生など、国語教育界の旗頭ともいべき先生方が本学においてだったが、教室の主体を読者に置く、そこにどんな授業があるのか、「読む」とはどういうことなのか、それを追究してきた先生方の中に丹藤先生もいらしていた。丹藤先生は近著『文学教育における読書行為の研究』のなかで、戦後文学教育を読書行為論の視点から批判的に検討し、言語論的転回以後の読書行為論の理論と方法を構築されている。そして、文学教材をナラティブ・メソッドによって分析していくことで、文学教育の可能性を追究されている。講演会のなかでは、工業高校や定時制高校教員のころの生徒の厳しい反応と先輩教員からの「元文学青年ならこの生徒たちに文学を教える」という言葉が教育の視点から文学を見てみようという道に入ったというお話が印象的だった。

今回の講演会では「行為への誘い—文学教育の過

去と未来—」をテーマに80分にわたって『走れメロス』の教材を取り上げながらお話しいただいた。戦後文学教育の平たんではなかった道のりを概観をお示しになった。そして、教科書に載っている教材は主題を押し付けて読ませるものではなく、批判的な生徒の声は「読めていない」わけではない、教師自身が読みをもち教材の価値を見極めることが大事であるとの示唆があった。最後に、文学教育は個人の内面に働きかけて個人を励ましていくものであり、そこに文学教育の未来があるとの言葉をいただいた。

実利を求める時代の趨勢の中で、よりよく生きることを私たちは求めているのではないか。「もっと文学を」というメッセージを温めていきたい。

(国文学科特任教授 田中 均)

講師紹介

丹藤博文

1960年弘前市に生まれる。北海道立高校教諭の後、東京学芸大学大学院修了。東京都立高校教諭を経て、現在愛知教育大学教育学部国語教育講座名誉教授・特別教授。博士(教育学)。専門は国語科教育(文学教育)。著書に『教室の中の読者たち—文学教育における読書行為の成立—』(学芸図書)、『文学教育の転回』(教育出版)など。





英文学科主催講演会

エストニアプレゼンテーション ～北欧の小国「エストニア」で見つけた未来のカタチ～

開催 6月12日(水)

講演者 熊谷宏人氏

エストニアの大学に入学し、その後現地で「Next innovation OÜ」を創業された熊谷宏人氏を2024年6月12日にお招きして、「エストニア」というテーマのもと、講演会を行った。熊谷氏がエストニアを知る以前の話から、「Next innovation OÜ」を立ち上げるまでのことを語っていただいた。経歴について伺う前に、参加者は自己紹介をしたり都留文科大学の良い点を発表したり、また、講演会内容に則した質問を付箋に書いたりした。その後、「〇〇より〇〇」という言葉を起点に、当時思った大事なことについて講演していただいた。そして、氏のエストニアでの活動やインターン研修の動画を通してエストニアについて紹介していただいた。

今回、特に私が関心を持ったのは、「どこかの100人より目の前の1人」という言葉だ。氏は最初から起業をしたいという考えはなかったという。しかし、以前から人材育成事業に従事する友人からの影響で、人材育成を途絶えさせたくないという思いで起業したという。私はこの話を伺い、今までそんな考え方をしたことがなかったことに気づいた。目の前の1人を助けたこともなければどこかの100人を助けたこともない。しかし、身近な人が助けを求めていたら私は助けることができるだ

ろうか。今の私は助ける勇気や力をもっていない。だからこそ、今から目の前の1人を助けられるような人になりたいと思った。

また、「Next innovation OÜ」を立ち上げてからの話を伺った。この話からアントレプレナーシップを身につける大切さを学んだ。これは自ら考えて行動するという起業家的行動能力を表したものだ。つまり具体的に目標を設定して達成するという意識することである。ただ人の話を聞くだけではなく自分で考えて問いを見つけるアントレプレナーに今日からなしてほしいと氏は語った。

最後に氏は我々に、繰り返し問うことやその問いから見えてくるものの重要性を説いた。自分の目標やゴールを見つけて達成するための手段を考えて行動する大切さについて考えさせられる講演になった。

講師紹介

熊谷宏人



東京生まれ。日本の大学を1年で退学し、20歳で教育先進国かつIT立国である北欧の小国エストニアの大学に入学。その半年後に現地で「Next innovation OÜ」を創業し、以来両国間で教育プロジェクトに従事。アントレプレナーシップを軸に、人生をデザインできる人が増える社会への貢献がテーマ。



地域社会学科主催講演会

高校『歴史総合』との対話

開催 7月20日(土)

講演者 小川幸司氏

2024年7月20日(土)、都留文科大学地域社会学会主催において、小川幸司先生を講師にお迎えして、高校新科目『歴史総合』についての講演会を行った。

講演内容は、「歴史総合との対話」というテーマで、自ら高校で実践した歴史総合の授業をギャラリーに問いかける形式やギャラリーをグループ化して話し合う場面もつくり、講演会というより、ワークショップを取り入れ、ギャラリー参加型の会で行った。特に印象的だったのは、有名なカフカの『変身』を導入として、次の問を出す。「カフカは生前、『変身』のザムザを挿絵にすることを固く禁止していた。私は、その理由について、変身したのはザムザ(→虫に変身)だったのか、それともザムザの家族のほう(→ザムザを虫扱いする人に変身)だったのか、両方の可能性を残したかったからだと

思っている。人間がある朝目覚めたら「人間扱いされなくなっていた」(まるで虫のように扱われていた)という事例を、歴史のなかから挙げてみよう。その場合、誰の考え方がどのように変化したことで「人間扱いされなくなっていた」という事例が生じたのだろうか。ここから1600年代からのスペインの先住民支配から始まる人種、民族問題、現代のパンデミックによる差別、LGBTQの人々への差別に繋げていくのである。小川先生の深い教養が生み出す問いに参加していた学生にも将来の良い影響を与えたかと思う。

今回、4年社会科ゼミのゼミ生や私が世話人の一人として活動している中等社会科実践研究会の協力も得た。盛況な講演会であった。

地域社会学科教授 西尾 理



講師紹介



小川幸司

長野県蘇南高等学校校長を経て、現在、長野県伊那弥生が丘高等学校教諭。1966年生まれ。東京大学文学部西洋史学科卒業。長野県各地の県立高校や県教育委員会などに勤務。専門は世界史。2015-16年、中央教育審議会の社会・地歴公民ワーキンググループの専門委員を務めた。著書に『世界史との対話』全3巻(地歴社)、『岩波講座世界歴史01 世界史とは何か』(責任編集、岩波書店)、『歴史総合を学ぶ① 世界史の考え方』(共著、岩波新書)など。新科目『歴史総合』の推進者の一人である。小川先生は、高校教員でありながら、岩波講座世界歴史の編集委員をつとめた。そして『岩波講座世界歴史01 世界史とは何か』の巻頭論文を書いている。また校長職にあったが、自ら降格人事を行って、教員に戻り、『歴史総合』の授業を自ら実践している。

部活動・サークル活動紹介

都留文科大学マンドリンクラブ

都留文科大学マンドリンクラブは、現在約 20 名で活動しています。創立 60 年を超える歴史ある部活となっています。

マンドリンを知らないという方も多いと思いますが、マンドリンとはイタリアで誕生した弦楽器で、トレモロ奏法で演奏するのが特徴です。当部では、マンドリン、マンドラ、マンドロンセロ、クラシックギター、コントラバスを用いてオーケストラという形をとって演奏をしています。

基本的に桂川祭と定期演奏会での発表に向け

て活動をしています。それに加えて、今年は 10 月に地域の方々の前で発表をさせていただきました。現在は 12 月に予定している定期演奏会に向けて、日々練習を行っています。マイナーな楽器のため初心者がほとんどで、音楽経験がなかった部員も少なくはありません。そのため大変な部分も多いですが、皆で力を合わせて練習に励んでいます。これからもマンドリンの音色を皆様にお届けできるよう精進して参ります。

都留文科大学マンドリンクラブ 伊藤 尊



都留文科大学管弦楽団

私たち都留文科大学管弦楽団は、1974 年に弦楽器を中心とした弦楽合奏団(室内アンサンブル)として発足し、今年で創立 50 年を迎えました。当団常任指揮者の吉田悟先生のもと、現在 47 名で活動しています。

当団ではクラシックをはじめとした管弦楽を、より身近に感じてもらえるような演奏を目指して日々練習に励んでいます。今年は、春のスプリングコンサートや学生主体で行われる学園祭でのミニコンサート。そして一年の集大成である秋の定期演奏会や、年末に催される都留市の市民第九演

奏会、クリスマスコンサートなど、多くの演奏の機会に恵まれました。

これらの演奏会は日々ご指導いただいている指揮の吉田先生をはじめとするトレーナーの先生方や、演奏にご賛助いただく OB・OG の皆様、大学関係者や地域の皆様のご協力のもと成り立っています。音楽を通して人との繋がりを感じられる喜びや、それに対する感謝の気持ちを大切にしていきながら、これからも引き続き精進してまいります。

都留文科大学管弦楽団団長 新井 修示



女子ソフトテニス部

こんにちは!都留文科大学体育会女子ソフトテニス部です。

現在、私たちは幹部である 3 年生 5 人、2 年生 3 人、1 年生 5 人で活動しています。関東学生リーグに所属しながら、山梨県内の選手権から全国の国公立大学の大会など、年間を通して幅広くいろいろな大会に参加しています。部員のテニス歴は様々で、それぞれの経験を活かし、学年や性別を超えて互いにアドバイスをし合いながら練習に取り組んでいます。練習は基本的には週 5 日、平日は 1 限前の朝練となります。朝早くからの部活の

あとに大学の授業、放課後や休日にはアルバイトや委員会の活動と、一人一人が毎日を忙しくも充実させています。今年度は 11 月の秋季リーグ戦が終わると幹部交代となり、現 2 年生を幹部として新体制での活動が始まります。リーグ戦は春と秋の年 2 回、毎年千葉県の子子町にて行われています。リーグ内優勝と昇格を目指して、部員一同これからも練習に励んでまいります。応援よろしくお願いいたします!

女子ソフトテニス部 伊関 由唯



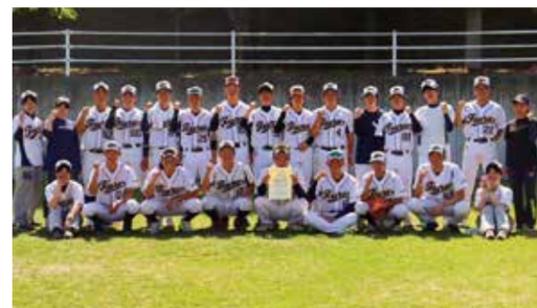
男子ソフトボール部

私たち男子ソフトボール部は、現在部員 25 名で活動しています。昨年の秋リーグで一部昇格を果たし、今年の春リーグでは 3 位入賞、インカレ出場権を獲得、さらにインカレではベスト 16 という成績を取ることができました。一人ひとりが大きな目的意識を持って日々の練習に励み、チーム一丸となって取り組んできました。どんな試合展開であっても最後まで諦めない気持ちを常に持ち、最後の最後まで全力を尽くす姿勢を心掛けてきました。この結果は、これを徹底したからこそ得られた成果であると強く思います。

また、ソフトボールの技術だけでなく、チームワークや人との繋がりも大切にしながら、毎日の練習に取り組んでいます。仲間と共に努力し、困難を乗り越えながら、私たちソフトボール部は一步ずつ成長してきました。

今後も、日頃から支えてくださっている多くの方々への感謝を胸に、2 年連続インカレ出場を目標に頑張っていきます。応援して下さる皆様に結果で恩返しするために、さらなる成長を目指し、精進していきます。

男子ソフトボール部主将 平塚 郁哉



第48回
鶴鷹祭
実施報告



第69回
桂川祭
開催報告



「第48回鶴鷹祭(都留文科大学・高崎経済大学総合体育対抗戦)」が令和6年6月22日、23日の2日間で開催されました。昨年度コロナ禍による中断から4年ぶりに都留文科大学にて行われた鶴鷹祭ですが、隔年で開催地を交代し今年度は高崎経済大学で熱い戦いが繰り広げられました。

競技では選手たちが一進一退の攻防を繰り返し、接戦に次ぐ接戦で大きな盛り上がりを見せました。最後まで粘り強い試合を行いながら惜しくも本学は勝利を納めることはできず、高崎経済大学が初の6連覇を飾りました。試合後の交歓会では学校という

垣根を越え、両校の部員同士で健闘を称え合い親睦を深めました。

日頃は別々に活動することの多い各体育会部活動が一丸となって対戦し、応援する。他に類を見ない学校単位で行われる対抗戦はスポーツ交流という枠にとどまることなく、両校にとって新たな「伝統」となりました。

来年度は再び都留文科大学に舞台を移し、次こそ勝利を掴むための対抗戦に挑むことになります。「伝統」が継承され、鶴鷹祭が両校の発展の場となり、より一層熱い戦いが見られることを期待します。

第69回桂川祭は「色鮮やかで賑やかなものになりたい」という思いを込め、「Vivid」というテーマで開催いたしました。今回10月31日から11月2日にかけて3日間行われた桂川祭は、残念なことに天候が不安定な中で開催となってしまいましたが、負けず盛り上がりのある桂川祭となりました。

1日目はシャボン玉やビーズ体験、トッピングプリン販売、CASINO、出店アピール大会、仮装コンテスト企画を、2日目お化け屋敷や射的、オリジナルプラ板作成、わらび餅ドリンク、イントロドン、点数予想カラオケ企画を、3日目にはじゅんいちダビッドソンさんと紅しょうがさんをお呼びした芸能人企画、

牧場やタワークラッシュ、バルーンアート、ビンゴ企画を行いました。また3日間を通してフリーマーケットやスタンプラリー、多くの学生が参加したスポーツ祭典、各学生団体による出店やステージパフォーマンスが行われたほか、校内には色鮮やかな装飾が施されました。

バルーンリリースから幕を開けた第69回桂川祭は、3日間を通して多くの方に足を運んでいただき、テーマ「Vivid」にぴったりの賑やかな桂川祭となり、最終日に花火を打ち上げ、幕を閉じることができました。皆様にとって私たち114人の実行委員が作り上げた桂川祭が素敵な思い出となりましたら幸いです。

体育会会長からの
コメント



中川 翔太 (副実行委員長兼体育会会長)

運営・企画に携わり、選手としても競技に参加させていただき、目まぐるしく過ぎた2日間は私にとってかけがえのない経験と思い出になりました。ホームであられる高崎経済大学の皆様、各体育会部活動の選手たち、開催にあたってご支援い

ただいた全ての方々に改めて御礼申し上げます。両校の応援にも熱がこもり、親睦も深まったことで体育会の結びつきはより一層強くなったと思います。この鶴鷹祭と両校の親交が今後も継承されていくことを願っています。

実行委員長
挨拶

飯塚 知聖 (桂川祭実行委員長)

今年度は残念ながら不安定な天候の中での開催となってしまいましたが、多方面の方にご尽力賜り、最後まで桂川祭を中止することなくやり切ることができました。この場をお借りして、実行委員一同御礼申し上げます。しかし、悪天候での運営に慣れず、対策が遅れが出てしまい来場していただいた方や、各団

体様には大変ご迷惑をおかけいたしました。今年度の経験を次年度にしっかりと引き継ぎ、どんな天候でも最高に盛り上げられる桂川祭を運営できるよう尽力いたします。最後に、第69回桂川祭にご来場いただき本当にありがとうございました。第70回桂川祭も皆様のご来場を心よりお待ちしております。

オープンキャンパス実施報告



8月3日(土)、4日(日)に夏季オープンキャンパスを実施いたしました。対面でご参加くださった方は両日合わせて2906名、オンラインでのご参加は両日で340名となり、合計3246名の方々が夏季オープンキャンパスにご参加いただきました。連日の猛暑のなか、北海道から沖縄まで44都道府県から本学が位置する都留市へご来場くださった事は大変ありがたく存じます。

1号館の竣工とともに(現在の都留市役所がある場所から)田原の地へ移転してきたのが1966年になります。その1号館も来年度から建て替えいたします。60年代モダニズム建築の面影を残す当時の最先端建築物であり、現在まで数多くの講義で使われてまいりましたが、歴史ある校舎をご覧いただけるのも本年度が最後となる予定です。

来年度は本学創立70周年を迎えます。本学の歴史を

引き継ぎつつ、新しいツルブンへ変わっていく姿を多くの来場者の方に感じていただけたのではないのでしょうか。

ご来場頂いた高校生のうち、3年生が50%、2年生が37%、1年生が12%であり、学科説明会や特別講義では、低学年のうちから自らの将来を真剣に考える姿が印象的でした。

アンケートの自由記述では、教職員・学生の丁寧な対応を評価頂ける記述が数多くありました。教室のご案内や駐車場の誘導などの反省点につきましては、来年度以降改善し、よりスムーズな運営ができるよう心掛けてまいります。準備・運営にご尽力頂きました教職員・学生の皆さんに心より感謝申し上げます。

広報委員長 吉岡 卓

第73回 関東甲信越大学体育大会



関東甲信越大学体育大会は、学生スポーツの健全な発達及び普及と関東近郊の国公立大学の親睦を図ることを目的としたスポーツ競技大会で、本学は平成16年度から参加しています。

現在は12大学が本大会に参加しており、今年度で第73回目を迎えました。

各競技は、山梨県・長野県・新潟県の県内体育施設(参加大学の施設を含む)にて行われました。大風10号の影響により一部競技において中止を余儀

なくされましたが、開催された競技では熱い戦いが繰り広げられました。

本学からは、17競技中8競技に参加し、「陸上(男子)個人 5,000m 3位 / 棒高跳 1位 / ハンマー投げ 2位・3位 / 砲丸投げ 1位・3位」「陸上(女子)個人 1,500m 3位 / 5,000m 2位 / 砲丸投げ 3位」「剣道(女子)団体戦 3位」「空手道(男子)団体組手 3位」「空手道(女子)団体組手 優勝」など素晴らしい成績を収めました。

教職実践研究会



8月10日(土)～11日(日)、第4回教職実践研究会が開かれました。今年は、全国からのべ130名の参加者があり、学び合いの輪を広げることが出来ました。

この研究会は①卒業後10年目程度までの現職教員が現場で抱える問題を交流して学び合う②そこで得た課題を本学のカリキュラム改善に活かす③在学生にとって教職現場の実態と、その中での先輩たちの生き方に学ぶ。そんな場となるよう企画されたものです。

1日目の最初に分散会を行い、学校現場での様子やその中での喜び、悩み、辛さなどを率直に語り合い、交流することが出来ました。

記念講演会は、千葉大学教育学部名誉教授片岡洋子さんに「教育とケア - ケアの視座から教育を考える -」という演題で話してもらいました。今年は話を聞くだけでなく、参加者からの多方面にわたる質問に対して片岡さんにこたえてもらい、教育における「ケア」という概念の理解が深まりました。



2日目は、小学校低学年・小学校中学年・小学校高学年・中学高校・多様なニーズに応える実践の5科会に分かれての学び合いと全体交流でした。

今年は学生の参加も25名に増え、「卒業論文で研究しようとしている内容と被る部分があり、とても参考になりました。」という学生や教員採用試験2次を前に励まされたり、教員になる上での不安などを解消する場にもなりました。

研究会全体を振り返って参加者から「去年参加したときにも感じましたが、この実践会は表面的・技巧的な教育術ではなく、教育の本質を考えられる時間をもらえるので、本当に勉強になりました。ありがとうございました。」という感想も寄せられ、子どもに寄りそい、子ども理解を大切にしている都留文科大学の学びのよさを確かめ合うとともに在学中から卒業後の教職支援交流会の取組を含め新しいつながりと広がりを見出すことのできた研究会となりました。

教職支援センター 阿部真一



成績優秀者表彰式



6月19日(水)に、昨年度(令和5年度)の学業において特に優秀な成績を修めた学生の功績を称える「成績優秀者表彰式」が行われました。

学科・学年ごとに成績最優秀者及び成績優秀者を選考し、国文学科16名、英文学科15名、比較文化学科15名、国際教育学科6名、学校教育学科15名、地域社会学科15名の計82名の学生が表彰されました。式典では、加藤学長から表彰状が授与され、お祝いの言葉をいただきました。

また、表彰された学生には、平成26年度より創設された「成績優秀者奨学金」が給付されました。

前期修了者卒業式

9月25日(水)、本部棟3階大会議室において、令和6年度前期終了・卒業証書の授与式が執り行われました。

今年は15名の学部卒業者のうち、8名が出席しました。当日は、担当教員をはじめ多くの教員

が見守るなか、一人ひとりに卒業証書が授与されました。

その後、副学長から卒業生に「贈ることば」として激励や祝辞が贈られ、卒業生たちの前途を祝しました。



市民公開講座

7月27日(土)、THMC6404 教室において、学校教育学科 上原明子教授及び本学学生による、市内小学生を対象とした「英語であそぼう!」が開催されました。8名の参加者は、本学学生が考案した英語を使った「ゲーム」や「クイズ」を通じて楽しく英語を学ぶことができました。

7月28日(日)に大学体育館において、ロンドン五輪陸上競技日本代表の佐野夢加特任講師に

「英語であそぼう!」 「オリンピックと走ろう!」 佐野夢加のかけっこ教室

よる、市内小学生低学年とその保護者を対象とした「オリンピックと走ろう!佐野夢加のかけっこ教室」を開催しました。小学生たちは保護者と協力して行う予備体操やスキップ、スタート練習、マーク走などを使用して、「走ること」について学びました。小学生、保護者合わせて35名が参加し、最後は簡単なゲームをして参加者同士が楽しみながら走ることに触れ合う時間となりました。



現職教員教育講座

地域交流研究センターでは、7月29日(月)に「現職教員教育講座」を開催しました。本講座は、山梨県総合教育センターの中堅教諭等資質向上研修の選択講座として同センターと共催で開催しています。県内の小中学校・高校・支援学校から延べ104名の現職教員の方々が受講されました。

講座は午前・午後の2部に分かれており、午前の部に教職支援センター 阿部真一特任教授がTHMC6201 教室において、「道徳性とその涵養

」、午後の部に学校教育学科 山本剛特任教授が自然科学棟 S1 教室において、「教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用1」をそれぞれ担当され講義が行われました。

参加者からは「試行錯誤を繰り返しながら、考え続ける姿勢を養っていくことが重要であると学べた」、「資料が見やすく、流れもわかりやすかった。実際の現場を想像しながら内容を考えることができた」など、たくさんの意見が寄せられました。



子ども公開講座

「佐野夢加のかけっこ教室」 「重さのふしぎ-言うことを聞く金魚と スノードームに挑戦しよう-」 「デザインアプリ Canva で おもしろいものを作ろう!」

都留市教育委員会「放課後子ども教室」事業の共催となる「子ども公開講座」を開催しました。

6月30日(日)には佐野夢加特任講師による、小学生1~4年生を対象とした「佐野夢加のかけっこ教室」が開催され、12名が参加しました。スキップやスタート練習などを通して走りの向上につなげるとともに、走ることの楽しさを学びました。

8月16日(金)には自然科学棟において、学校教育学科 三崎隆特任教授による、小学生2~4年生を対象とした「重さのふしぎ-言うことを聞



く金魚とスノードームに挑戦しよう-」が開催され、13名が参加しました。魚の形をした容器を用いた物理実験やスノードームを作ることで、重さの不思議に触れることができました。

9月7日(土)にはTHMC6303 教室において、国文学科 野中潤教授による、小学生1~6年生を対象とした「デザインアプリ Canva でおもしろ



いものを作ろう!」が開催され、24名が参加しました。「Canva」を使って、基礎操作を学びながら缶バッジのデザインを作成しました。最初は慣れない操作に戸惑いながらも楽しくデザインすることができました。後日、作成したデザインの缶バッジが参加者へ届けられました。

生々しいものとの触れ合い

地域社会学科 小島 恵



生パンダは笹より枝を好んでいました

現代の日本で生活していると、それが都会であれ、中山間地であれ、生々しいものと触れ合う機会は少ない。肉も魚も綺麗な切り身になって色とりどりのトレーに乗せられているし、都会では鈴虫が鳴いているのを聞いただけで驚いて感動する人までいる。でも、生々しいものと触れ合い心震わせる経験なくしては、人の心に届くようなものは作れないと思うことが最近いくつかあった。

深夜にこっそりと、秋田の漁港から届いたばかりの初めて見る魚の鱗を引き、内臓を掻き出して塩焼きにして美味しい美味しいと平らげる。下北沢の小さなライブハウスに出ている頃から応援していたアーティストがオーチャードホールで開くコンサートを聴きに行く。ずっと尊敬していた思想家の講演会に足を運び、その人の身体からその思想が語られるのに恍惚とする。切り身には、CDには、本や配信にはないものが、そこにはある。数時間前まで海を泳いでいた魚の筋肉質な身。美しい内臓。ホールに行くまでの道すがら思い起こされる20年前の記憶。その場にいた人とはしか共有されない音楽。思想家の息遣いや言い淀み、次の言葉が口をついて出るまでの間。目が輝く瞬間。ここ数年で私たちは、「デリバリー

／配信／オンラインの方が、時間もお金もかからないし、効率も良いし、それで十分」と、半ば自分たちを誤魔化すようになっていた。でも、そんな誤魔化しはもうやめたい。時間もお金もかける価値があるものは絶対にある。それが、時間もお金もなくて、手に入れないときはある。それは悲しい。悔しい。だからこそ、手に入れたときはより一層心が震える。この心の震えこそ、人にしか味わえない最も幸せな経験だと思う。今回の学報では、夏季休暇を利用して学外で学んできた学生が手記を寄せてくれた。それぞれに、そのときにそこでしか感じられない想いを抱えて帰ってきたようで、とても嬉しい。そういう生の経験を、これからももっともっと重ねてほしいと思う。

ぶんだいでい堂

カズオ・イシグロを求めて



武富利亜 編著
加藤めぐみ 他 執筆
2024年4月発行
長崎文獻社

◇加藤 めぐみ
英文学科 教授

入門ポピュラー音楽の文化史
〈戦後日本〉を読み直す



輪島裕介・永富真梨 編著
青木深 他 執筆
2024年8月発行
ミネルヴァ書房

◇青木 深
比較文化学科 教授

植民地朝鮮と〈近代の超克〉
戦時期帝国日本の思想史的断片



関東暉
2024年9月発行
法政大学出版局

◇関 東暉
比較文化学科 准教授

公立大学法人
都留文科大学

〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1
☎ 0554-43-4341
URL: <https://www.tsuru.ac.jp/>

都留文科大学学報 第156号 2024年12月9日発行

都留文科大学広報委員会

吉岡卓 (委員長)・日向良和 (副委員長)・加藤浩司・加藤めぐみ・堤英俊・菊地優美・小島恵・上野貴彦・原和久・安富博史 (企画広報担当)・大輪知穂 (IR担当)・舟久保薫 (キャリア支援センター担当)・天野麻由 (企画広報担当)・奥脇開斗 (企画広報担当)